

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590500049		
法人名	株式会社和福祉サービス		
事業所名	グループホームなごみ		
所在地	宮崎県小林市南西方6257-65		
自己評価作成日	平成29年11月6日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 宮崎県介護福祉士会		
所在地	宮崎県宮崎市原町2-22 宮崎県福祉人材センター人材研修館内		
訪問調査日	平成29年12月12日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

小林市内の南西部に位置しており、周辺は田畑があり、霧島連山を眺めたいへんのどかな環境にあります。地区の自治会に加入して、地域の行事や祭りごとなどにも積極的に参加しながら、地域とのふれあいも大切にしています。事業所主催の夏祭りでは地域とのふれあいもできています。また地域住民のみなさんが気軽に声をかけていただいたりしています。受け入れるだけではなく、地域に出向いていく姿勢を持つことで、地域住民の理解が得られると思います。その他できるだけ外出の機会を設けたりしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム代表者及び職員は、利用者が地域と繋がりが暮らし続けられるよう、近所付き合いや地元の活動、地域住民との交流に積極的に取り組んでいる。同法人のデイサービスとグループホームが隣接し、互いに協力できる体制にある。向かいにある地域交流センターでは地域の健康体操が実施され、利用者も見学している。認知症サポーター講座や徘徊模擬体験に、職員も寸劇を交えての参加をしている。利用者は日中、自由にホームを出入りすることができ、近隣住民の見守りや声かけもあり安心して暮らせる環境にある。家族への報告や連絡も月1回の文書送付と、必要に応じて電話連絡を行い家族との関係作りにも努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ケアの理念は毎日申し送りの際に復唱し、その日の業務に実践できるようにしている。しかし一人ひとりが理念を意識の中で捉えながらケアを行実践できているかはわからない。	管理者と職員が共に協議した理念を、毎朝の申し送りの際、全員で唱和している。またホームで作り上げた10項目の行動指針も、毎朝職員一人ひとりがその日の目標を挙げて、実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	ホームは地域の自治会に加入しており、地域行事に参加したり、ホームの行事に招待するなど、交流する機会を設けている。	今回、管理者は自治会の組合長をしている。地域の盆踊りや餅つき・防災訓練に参加したり、保育園児や小・中学生の訪問等もあり、地域との交流に努めている。隣地の地域交流センターでは地域住民の集まり等があり、参加することもある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	管理者や職員が地域住民に対して、認知症サポーター養成講座や徘徊模擬訓練等に参加することで、地域に認知症の理解を深めていくようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では委員からの意見を受け、職員会議等でその意見を職員に報告している。また意見についてはホームの運営や利用者の暮らしの参考としている。	運営推進会議で出た《認知症の理解》についての相談など、前向きに取り組んでいる。認知症サポーター養成講座や徘徊模擬訓練等を地域住民や中学生参加のもと職員の寸劇を交えながら実施している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の介護保険担当者等や地域包括支援センター等の関係機関に対して、介護保険制度や運営面について助言を仰いでいる。また研修会などの情報も市の担当者会からいただいたり、市内の連絡会では、制度面の情報もいただいている。	市の介護保険担当者等を訪ねて、制度面や短期入居に関する相談や研修に関する情報を得ている。電話やファックスも活用し、日頃から連携を密に取っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ホームの理念として、身体拘束や玄関施錠をしないという方針であり、言葉遣いについても、利用者の権利擁護の理念を実践できるようにしている。職員の行動指針についても方針として掲げ、職員全体でケアに取り組み、業務の中でそのケアが拘束にあたらないかなどを話し合っている。	管理者及び職員は、身体拘束の内容と弊害を認識している。ホームの玄関施錠は夜間のみで、利用者は日中見守りのなか自由に入出入りしている。職員研修では、拘束について常に話し合い、職員一人ひとりが、言葉遣いや優しい言葉かけを振り返り、身体拘束をしないケアを意識付けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止については身体拘束をしない方針と併せて権利擁護の側面から、事業所の方針として取り組んでいる。職員会議や内部研修では、職員の言葉遣いや接遇について学ぶ機会を持っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常的に権利擁護について、職員に全体で確認し共有している。今後も制度を学ぶ機会を持ち、それを活用できるようにしていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に利用者や家族が不安にならないように事前説明を行い、入居の際には契約書や重要事項の説明を本人家族におこない、安心と納得の上で入居いただくようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者は職員に対して自由に意見を言えない時もあるようだ。家族面会時にはその都度意見を聞く用意しているが、今後利用者や家族が遠慮なく意見や要望が言える雰囲気づくりに努めていきたい。また第三者委員等の機関は設けていない。	利用者が意見を自由に言えるように、担当職員がコミュニケーションや雰囲気作りを行なっている。家族に対しては、面会時に意見や要望が言いやすい関係作りに努め、遠方の家族に対しては月1回の文書や随時電話で生活状況の報告や意見の確認を行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見は、職員会議のほかその都度意見や提案を聞くようにしており、可能な限り出された意見をホームの運営に取り入れるように努めている。今後も職員とのコミュニケーションを図り、運営につながるよう取り組んでいきたい。	法人代表者は、年1回、職員一人ひとりに時間をかけて意見や提案を聞く機会を設けている。また毎月個別に話せる機会も設けている。海を見に行くバスドライブや、記録用紙についての提案など反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務時間や労働環境等については、職員個別に職員に合った条件に配慮している。また職員とのコミュニケーションを図り、勤務環境を整えたりしている。今後さらに職員が働きやすい環境づくりを構築していきたい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員のひとり一人の能力やスキルを向上させていくための外部研修会への参加や資格取得のための支援を行っている。今後も個別に職員育成のための努力をしていきたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域の同業者でつくる連絡協議会の勉強会に参加する機会を設けており、その際に他のグループホーム等との交流を図っている。又随時同業者への連絡などを行い、情報交換を図っているが、今後もさらに交流を図って行きたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にホームでの生活に不安のないように、事前面会の際にホームの説明をしたり、本人や家族に見学していただき、本人が不安のないように話をするようにしている。また入居直後も本人が不安のないよう会話しながら対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族についても入居前のホームの見学や面談の中で、ホームの環境などについて説明をおこない、家族の要望についても時間をかけて聞くようにしている。今後も常に傾聴しながら本人の意向に沿ったケアができるようにしていく。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の事前のアセスメントや家族からの聴取により本人が入居後にどのように生活していきたいかを確認し、ホームでのケアプランを基にした支援ができるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は常に共同生活しているという意識の中で、日常生活上の支援を利用者と共におこない、そして利用者に移行の確認を行い、できないところを支援するようにしている。職員本位にならないようにしているが、今後も深く本人に寄り添えるようにしていきたい。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にはいつでも面会ができるようにしている。面会時には居室などでゆっくり面談できるようにお茶などを提供するなど配慮している。また家族ができる支援として、外出や受診などはできるだけ家族にお願いするようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人馴染みの関係や場所など、懐かしい思いを断ち切らないように、家族や職員が外出支援しているが、もう少し個別に支援できるようにしていきたい。	入居前のかかりつけ医や馴染みの理髪店・美容室、墓参りなど本人の希望があれば外出支援を行っている。地区の敬老会にも参加し、友人関係も継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士、食堂ホールやリビングなどで会話しながら日常生活が送れるように支援している。居室で過ごす利用者に対しても声掛けしている。生活の中でお互いに助け合える雰囲気をつくっていくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後の生活支援についても、関係機関との連携を図りながら、情報の提供を行い、利用者や家族が不安にならないように、新しい生活の場やサービス利用につなげていけるように支援している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ホームでの生活については、本人や家族からの情報により、ひとり一人の意見や意向を尊重して生活支援を行いたいと思っているが、業務の関係や人的な関係でうまく実践できていない部分もある。	職場研修においてセンター方式(一部)の記録シートを取り入れ、利用者の思いや意向の把握に努めている。日々の関わりの中で、表情や言動から意向の把握を行い、本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者個別にこれまでの暮らしや生活環境を、本人家族から収集し、日常でも会話の中で確認している。しかしひとり一人の生活支援に確実に結びつかない場合もあるので、今後も個別に寄り添って行くようにしていきたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別の生活スタイルがあり、それぞれに合った生活支援を行っている。またその日に体調によって、支援の在り方を考える時もある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員会議や担当者会議で支援の方法を協議している。利用者や家族、職員がみんなで関わり合って、プランが利用者や家族の思いとなるようにしている。また随時プランの見直しや評価をしている。	利用者がその人らしく暮らし続けられるよう、本人、家族、職員の意見を出し合い、現状に即した介護計画を作成している。家族の面会に合わせ担当者会議を開催し、家族の思いや意向を確認している。計画の見直しや評価も随時行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の昼夜日誌、健康チェック、個別記録などを確実に記録し、職員が利用者個別の情報や状況を把握できるようにしている。職員は自ら気づきをメモを取り、申し送り簿を確認しながら支援に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者個別のニーズや意向に沿うように支援している。今後新たな利用者や家族のニーズがあれば、事業所の機能を活かす事に対応していくようにしていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のまちづくり協議会や青年団等との協力体制を築いている。また利用者も地域行事への参加の機会もあり、幅広く地域資源を活用できるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者のかかりつけ医との連携は欠かすことなく、定期的に連絡調整している。また協力医療機関に対しても関係づくりを構築している。利用者や家族が安心できる体制を築いている。	本人及び家族が希望するかかりつけ医となっている。受診の際は生活状況の報告と、受診結果の把握に努め、適切な医療が行われるよう支援している。また協力医療機関とも連携を図り、安心できる体制作りを行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々看護職との連携を図り、小さい変化に対しても看護師へ伝え指示を仰ぐようにしている。利用者や家族、介護職も安心できる体制がある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院への情報提供を行い、その後病室訪問し状況を把握するとともに、利用者にはいつでもホームに帰って来れる事を伝える事で、安心して治療が受けられるような声掛けをしている。また早期に退院できるように病院関係者と随時相談している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化または終末期ケアについては、入居時の契約の際に説明を行い、終末期に対する同意をいただいている。未だその例はないが、職員は研修を受ける機会を設け、併せて職員間での終末期ケアの具体的な取り組みについて話し合う場を設けるようにしたい。	入居時の契約の際、終末期ケアについての説明を行っている。ホームでの事例はない。職員研修で重度化や終末期ケアについて学習し、マニュアルも作成されているが、夜間帯一人になる職員は不安も抱えている。	終末期ケアに向けての利用者や家族の意向を定期的に確認し、その都度ケア方針の説明を行い、本人や家族の思いに沿えるような話し合いを期待したい。終末期ケアの取り組みについて、職員の思いや意見を聞き、ホームの出来る事、出来ない事を話し合う場をお願いしたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアル化して緊急時に備えるようにしているが、いざという時のための救急法などの研修会や訓練は不十分なので、定期的に開催していきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の総合訓練を実施しており、消防署や地域住民、消防団の協力を得ている。また消火訓練も実施している。今後地震や噴火の際の災害に対しての訓練も実施していきたい。	地域住民や消防団の協力を得ながら、年2回の総合訓練を実施している。非常用備蓄品も法人全体として備えてある。近隣の住民への連絡体制も整っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	支援の一つひとつに必ず声かけするようにしている。また声かけに対しては日々利用者に配慮できるように、さりげない声掛けができるようにしている。今後も研修会等で適切な対応ができるようにしていきたい。	言葉かけについて繰り返し研修を行い、日々利用者に配慮した対応ができるように努めている。適切ケア・不適切ケア70項目のチェックリストとその理由を記入する事でケアを振り返り、尊厳について認識できる取り組みを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活支援の中で、利用者に対して強制するようなことはなく、日々の過ごし方を可能な限り本人の意思決定ができるようにしているが、今後も本人の思いを確認するなど、自己決定ができるように働きかけていきたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の生活のペースや意向に沿って支援しているが、支援の方法が画一的になったり、意向を確認せずにしてしまうこともある。業務優先や職員の都合にならないように注意していきたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者の服装や理美容などは、本人に直接聞きながら選択していただいている。馴染みのある理美容院を利用したりしている。意思確認が出来ない場合でも、声掛けするようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食器などは利用者個別の使い慣れたものを利用するようにし、食事の準備や後片付けは、一部の可能な利用者と一緒に作業している。また食事の際には一部の職員も利用者と一緒に会話しながら食事するようにしている。	利用者の出来る範囲で料理の盛り付けや、下膳、後片付け、などを行っている。日頃は一部の職員が利用者と一緒に食事を食べているが、月に1回カレーの日があり、全職員と一緒に食事をしている。ホームの菜園で採れた野菜も食卓に出されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分は毎日記録し利用者の栄養状態を職員が把握できるようにしている。水分などは摂取量の少ない利用者には工夫しながら提供している。また食事を分割食している利用者もあり、中間食も含めた工夫で支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後必ず歯磨きや口のすすぎを行っている。義歯は専用洗浄剤で洗浄をおこなっている。コップや歯ブラシは毎日消毒している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	紙おむつ使用者でも日中声掛けしながらトイレ介助をおこなっている。利用者個別に排泄パターンにより紙おむつの使用も工夫をしながら、紙おむつを出来るだけ使用しないような取り組みをしている。またその都度、排便排尿の量や頻度を記録している。排泄介助の時などは利用者の自尊心に配慮して支援するようにしている	排泄チェック表を利用し、利用者の排泄パターンを確認しながら声かけや誘導を行い、自立に向けた支援を行っている。声かけ時は利用者の耳元で声をかける等、自尊心に配慮した対応を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の場合には簡易体操の実施や水分摂取、乳製品や繊維食物などの食事に配慮して自然排便ができるように支援している。便秘が長い場合には主治医に相談するようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	毎日の入浴を楽しみにしている利用者もあり、個別に入浴の回数などについて配慮している。入浴時間の長さやタイミングなど、利用者に相談しながら行っており、適切な保清が図れるようにしている。	原則、毎日入浴としているが、利用者の体調や状況に応じて回数を調整している。異性の職員による介助は、毎回、尋ねるように行っており同意を得たうえで、入浴支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者個別の休憩や休息を取る時間やタイミングがあるので、個別に合わせている。また夜間も個別の時間に合わせた入眠支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の内服薬の把握は確実にを行うように、毎日の服薬確認と併せておこなっている。また服薬の変更があった場合でも確認を怠らないようにしている。服薬時の注意点は職員全員が確認できるようにファイル化している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の特技や趣味、昔の仕事などを把握して、利用者ができる事への支援をしている。家事や畑仕事などであるが、利用者にも楽しみが持てるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気が良い日などは散歩へ出かけたり季節ごとにドライブに出かけたりしている。また本人が行きたいところへは家族と相談しながら支援している。今後も個別に意向に沿った支援をしていきたい。	日頃からホーム周辺の散歩を楽しんでいる。また季節行事で外出やドライブが行われており、利用者の希望に応じて、家族による外出支援も行われている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者個人で手持ち金を所持できる方は少額を財布に持ってあり、外出時やホームへ来る移動販売などでパンなどを購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者からの希望があれば電話で話をしていたりしている。特に家族との電話での会話は自由にできるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースには季節の飾り物などを掲示し、居室からも季節の花々を楽しめるようにしている。また音や光、風、温度などに配慮しながら、空調調節も含めて居心地の良い空間を提供している。利用者の生活の支障になるようなものは置かないようにしている。	季節を認識できるような利用者の作品が、共有スペースに飾ってあり、バスドライブに出かけた時の写真も飾ってある。窓は採光を考えた作りで、ホームの随所が明るい。大きな窓からは季節感溢れる風景が眺められ変化を感じながら、ゆっくりした時間を過ごすことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂やリビングで利用者同士一緒にくつろいだり、会話が出来るようにしている。リビングでもソファにもたれながら居眠りしたり、テレビ鑑賞している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅で使用していた家具などを持ち込んでいただいたり、タンスなどもわかりやすいようにラベルを張るなど工夫している。混乱なく不安なく過ごせるようにしている。	自宅で使い馴染んだ家具や小物等を持ち込んだり、家族の写真などを飾り付けている。利用者個別の居室はプライバシーに配慮しており、過ごしやすい空間作りとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内は利用者が迷わないようにトイレや洗濯場、浴室に表示している。またトイレや浴室内、廊下などには手すりが設置しており、利用者が安心して生活できるようにしている。 居室も手作りの表札が掲げてあり、座布団などの個人の持ち物も間違わないように工夫している。		